

命を、生活を守った一本のアマチュア無線回線

函館地区救急法赤十字奉仕団

委員長 三澤 洋大(JF8NWJ)函館市

「三澤さん、奥尻の救援頼んだよ」日赤道支部事務局長、奈良崎氏からの電話で飛び上がった。今から 32 年前の話である、平成 5 年 7 月 12 日、午後10時 17 分、マグニチュード 7.8 の巨大地震、津波が奥尻島を襲い、壊滅的な被害をこうむった。被害あまりにも甚大であり、「奥尻復興は無理では」との解説が流布された。

当時私は「函館地区スキーパトロール奉仕団」の委員長を拝命、スキー場での事故防止、救護活動にあっていた。後年、くだんの事務局長に聞く機会あり「なんでスキーの専科なのに」と質問、「あんたなら何でも」の回答にあきれた。

指令を受理、ただちに派遣の団員名簿作成、と本人了解とりつけ、5～6 班編成と記憶。奥尻にはフェリー船便との知識しかなく、現場到着の時間で苦慮していたら、神の助け、佐川急便がヘリコプター 2 機の無償供与、江差、追分会館広場を発着場として、奥尻とのピストン運航開始であった。

さて、32 年前、当時は「携帯電話」の存在は無く、電話回線は災害直撃のため使用不能、われらアマチュア無線の独断場と化した。奥尻との直通通信を容易ならしめたのは、日赤無線奉仕団の管理する「リピーター」の借用であった、これで小生自宅 2 階の事務所と「奥尻、災害対策室設置の青苗中学校」との無線回線が確立された。幸い、スキー場での無線機使用の経験が生かされた、この直通回線がその後の救援活動の迅速化に大きな貢献を果たしたことは論をまたない。

この無線回線の多目的使用のため私は終日、自宅部屋から離れられず、救援活動の初期段階はまさに無線機との同居生活を

を強いられた。恥ずかしながら、活動一段落した後、入院生活に入った。「待ちわびる 身内の遺体上がる日を 余震のたびテレビに見入る」どなたが詠まれたものか忘れたが、被災状況の厳しさを肌で感じた記憶が鮮烈である。

無線での応答内容は読者皆様の想像にお任せしたい。ただ派遣の責任者として、余震収まらぬ被災現場で起居する団員の安否を心配する家族との連絡に力がはいったのが記憶にある。

奥尻一江差への帰路もヘリコの使用が許された。ヘリは救援物資の積み込みを容易にするため、両側の引きドアは外されていた、パイロットは「皆さん、ヘリが海上を飛びます。ゆれが激しいため床のロープにしっかり捕まって」団員は「ここで落ちてはなるもか」と腕に力がはいったとの報告が笑いを誘った。団員は語る、「電柱に張めぐらされた電線に海藻が沢山引っかかっていた。どれほどの津波の脅威がすごかったか。」ふるえながら語ってくれた。(死者、行方不明者 230名、住宅全壊594戸 半壊 400 戸 漁船の沈没 676、破損 838「被害報告より。」)



できたてのおにぎりは、ヘリで奥尻に運ばれた。

(注)日本赤十字社北海道支部発刊「平成 5 年北海道南西沖地震、救護、救援活動記録集」より